

研究所だより

細越 雄二

4年に1度のスポーツの祭典、ロンドンオリンピックが7月27日から8月12日までの17日間の日程で行われました。無気力試合で失格となった選手がいたものの、出場する各国の選手はフェアプレーで、最高のパフォーマンスを発揮し、スポーツの素晴らしさを伝えてくれました。日本のメダルは金7、銀14、銅17の合計38個と史上最多となりました。読者の皆さんはどの種目に注目されていたでしょうか？

最近では、オリンピックといえども、かかる費用については厳しい目が向けられていて、とくに強化対策費に対してメダル数の目標が達成できたかどうかなどチェックされています。「オリンピックは、勝つことではなく参加することにこそ意義がある」という言葉は昔のことになってしまったようです。確かに、オリンピック関連の費用には税金が使われていて、費用対効果のみならず、選手の言動や振る舞いにも納税者から厳しい目で見られることはやむを得ない面があるでしょう。2年前の冬季オリンピックで、制服(正装)を着崩した選手に対して、その後の記者会見での態度に非難が起り、さらに事務方の管理についても疑問が呈されたことがありました。やや行き過ぎた批判だったと思いますが、オリンピックに出場する選手は、日本代表という

「公人」としてみられていることを示す出来事でした。

「公人」としての振る舞いも大事ですが、費用対効果という点、メダル数というわかりやすい指標(結果)が重視されがちです。ただ、メダルには届かなくとも、それまでなかなか破られなかった記録を更新したときにもきちんとした評価がなされるべきだと思います。また、メダルや記録という観点だけではなく、(あまり注目されていない競技であっても)オリンピックでの活躍を受けて、その競技人口が増えるという波及効果も考えられるため、それに貢献した場合も評価されるべきでしょう(ただし、すぐにはわからないことが多いため、評価が出来るようになるまで時間がかかります)。

このようにみると、オリンピックの費用対効果を考える場合には、評価の目的によってどのような指標を用いて測定するかが異なるため、評価をする際には目的をはっきりさせておかないと混乱してしまい、次回に向けての適切なアクションをとることが出来なくなります。これは、自治体や国の政策にも同様に当てはまることだと思います。

4年後のオリンピックはブラジルのリオデジャネイロで開催されます。どのようなドラマが生まれるか、今から楽しみです。